



ポエムの窓

解説・高安義郎

今日の風

高安ミツ子

母さんが生まれた時も
やはり今日の風が吹いていたでしょう
生きていくことはいつも
今日の風を迎えています

戦後をひたすら生きる父母の姿にも
遊びの楽しさの幼い日々にも
やさしい今日の風がありました
そして、眠る際に見た
闇に輝いていた山の月に
今日のおしまいを感じたものでした

いくつもの季節が廻り
いくつもの時間が過ぎて
同じ風は決して吹いていません
いつも新しい今日の風が
母さんを包んでいました

一人の男性と出会い
君たちが生まれ
うれしい風が吹いたり
悲しい風が吹いたり
不安の風が吹いていました
今日の風には名前のない強さがありました
愛おしさと 親のエゴを重ねながらも
母さんは夢中で君たちの
育ちゆく姿を追いかけてました
何を伝えたかも覚えていません
大小の悲哀はあっても

日常生活の延長の営みを想像していましたが
想像しないことが起きうることを
今日の風は知らせています

コロナウイルスの蔓延は
生きることの もがきを映し出し

繁栄と自由に巣くっていた落とした穴を感ず
それは嘗ての人々がのぞいた苦しみで
過去でも 現代でも生きることへの人族的
同じ心の振り子のありかを示しています
ふと見ると庭の餌箱で

小さな体で細心の注意をはかり
二羽の雀が古米をついばんでいます
コロナウイルスを忘れるような
かわい命の風景です
外は人通りがない静けさです
見上げると
天は深く青く広がっています
いつか、今日の風が人々に笑顔をもたらしてくることを
母さんは祈ります

気遣ってくれる君たちに感謝しながら
母さんは父さんと過ごせる残された時間をはかつて
います
五月の風は鯉のぼりを
青空にすがすがしく上げています
そして母さんは今日の風を迎えています

詩集「今日の風」より

作者高安ミツ子氏は東金に住んで五十年になります。詩は二十代の頃から書き始め、東京にあった同人誌『若い人』という結社で詩作の勉強を始めたようですが、やがて千葉市を中心に活動している同人誌『玄』や東金市に拠点を置く同人誌『ホワイレター』などでは、今尚中心的な活動をされています。ホワイレターの名前はミツ子氏が命名したものでした。

今回紹介した作品は昨年発行したミツ子氏の第三詩集『今日の風』に掲載されたもので、同人の人気投票では最高得点を得たものです。

この作品は象徴詩です。では『風』は何を象徴しているのでしょうか。おわかりだと思えますがそれは『時間』です。とはいえ、人の生の営みは単に時間の経過で語れるものではありません。そこには複雑な心の動きがあり、人と人との係わりがあり、喜びや悲しみ、更には自分自身の心の変化もあるのです。乗っていれば自然に次の駅に連れて行ってくれる乗り物とは違います。ですから作者はそれを通りすぎる『風』と言う言葉で表現したのでしょう。

ではそのことを踏まえてこの作品を鑑賞してみましよう。

第一連と二連は作者の幼少時代に過ごした時の流れが感じられます。そこには戦後の苦しい時代を生き抜いた両親の姿を垣間見る事が出来ます。

三連は娘時代、不安と夢の中で前向きに生きた自分自身の姿をさりげなく語っています。

五連では結婚して東金にやって来た時代でしょう。慣れない土地で腕白坊主を育てながら悪戦苦闘した日々を、懐かしく思い出しているようです。確かに子育ては片手間で出来ることではないでしょう。無難な辛かったことも多々あったことでしょう。ですが、ようやく一人前になり親の元を巣立った今では、それは懐かしい思い出として残っているだけだと述懐しているようです。

作者の人生はそれで終わったのではありません。老後残された夫婦が思い出の延長上にある今を、新しい時間の中で生きようとする、思いも掛けない感染症が蔓延したりしました。ですがこれさえ氏は悲観したりしていません。自分にできる事を淡々とこなし、小鳥が古米をついばみに来る風景さえ楽しんでいきます。

最終連では、遠くで暮らす子供達が時折連絡してくれることに喜びを感じ、子供夫婦と孫達が健やかであることへの感謝を滲ませています。

直接過去を示し、その心境を記すのではなく、心の動きと時間の経過を『風』として表現したことがこの作者の謙虚さであり表現の巧みさだと思えます。同人会で最多票を獲得した理由は恐らくそんな所にあるのではないのでしょうか。

最後に、氏は二〇〇一年よりこれまで、『このときめき』の中で長く『ポエムの窓』を執筆されて来た詩人であることを申し添えたいと思います。